

暑い夏を実感できた日

新所原—掛川—金谷

新所原の駅前でにぎりめし等を買って込んだ面々。これから乗る天竜浜名湖鉄道の車窓をおかずに遅い昼食にしようという魂胆だ。しかし。発車5分前にホームに入ってみると1両しかないディーゼルカーは満席。ありゃまあ。腹は減っているのだが、まさか立って喰うわけにもいかんしねえ。で、しばらくは遠くに見え隠れする浜名湖の景色を眺めたり運転手さんのノッチさばきを眺めたり態度の悪い高校生を睨んだりとそれぞれ過ごしましたとき。



20分ほどで三ヶ日駅到着。ここで15分ほど停車するというので駅前に出てみた。歴史で習ったよな、ここが三ヶ日原人のふるさとなのだ。

駅をでて周囲を見渡してみると、まあごく普通のどこにでもある駅前風景。「原人くんの像」とかをちょっと期待したんだけどね。

このあたりから車内はすき始め、ようやくロングシートの部分に我々は座ることができた。座ったらとにもかくにも食事。時間は午後2時半、十分に遅い昼食といえよう。しかし私は妙にこだわりがありクロスシートで景色を眺めながらじゃなきゃイヤ、とか思っていたので腹を鳴らしながら我慢した。まああと数駅で車内はガラガラになるだろうというヨミがあったからだが。で、そのとおりになり、ようやくお食事ですわ。



食事のあとは満腹感と久々に歩いた疲労感から単調なローカル風景にうとうとしつつ掛川に。

掛川に着いたのが午後4時10分。掛川といえば内助の功でしか有名でない山内一豊の居城・掛川城があることで有名だ。さてここから金谷までがノンJRの旅全体を通しての最難関といえる。JRなら2駅先、営業キロで16.5km。大した距離ではないが、ここは南アルプスの山裾が遠州灘に落ちる地域である。平地の多い太平洋岸とはいえ相当な山地。江戸時代には箱根と並ぶ難所として有名だった中山峠も控えている。鉄道唱歌にも

いつしか又も暗となる 世界は夜かトンネルか 小夜の中山・夜泣石 問えども知らぬよその空

と唄われたトンネルの多い地域である。時刻表の地図にはこの2駅周辺をバスが走っているようには書かれていない。

駅前にあるバスの切符売り場でリーダーのS君が金谷までのバス路線について尋ねる。その後ろで私は苦笑していた。JRなら15分ほどで行けるところをわざわざバスを乗り継いででも行こうとするのだから。たとえバス会社に勤務しているとはいっても切符売り場のおばちゃんはJRを勧めるだろうなあと思った。ところが意外にもおばちゃんは我々の妙な質問に何の疑念も抱かずに、日坂峠（旧東海道の道中としては金谷までの1/3ほどの位置にある）までのバスがあることやいったん30km以上南にある御前崎まで出て、そこから乗り換え掛川と金谷の間

にある菊川へいくというアクロバチックな（というか非現実的な）提案をしてくれた。以前にこういう旅をする人でもいたのだろうか。

で、我々はもっとも現実的な日坂峠までバスに乗るべくバス乗り場に直行した。しかしバスはちょうど出たところであり、次は午後6時50分という、バスを待っていてはまさに日が暮れてしまう状況であると知ることになった。



我々は掛川城のふもとにある観光案内所で入手した旧東海道のウォーキングマップをもとに金谷まで歩くことにした。といってもそのマップによると金谷までは5時間以上かかるらしく、とてもじゃないが歩きでは常識的な時間に金谷に着くことができない。そこで途中までタクシーで行くことにした。あまりタクシーは使いたくなかったが旅程の都合もありしかたがない。この旅は「野宿もあり」という前提ではあるが、私とH君は今日中に自宅に帰らなくてはならない。なにがなんでも金谷に着いてもらわなくては困るのだ。もう夕刻が近い。

我々はタクシーに分乗して小夜の中山まで向かった。

むかしこの峠を越えようとした臨月の女性が山賊に襲われ命を落としたそう。それからというもの近くの石が夜毎すすり泣くのだと。不思議に思った村人が近寄ってみると、石と一緒に赤ん坊が泣いていたと。赤ん坊は観音菩薩が姿を変えた僧に水飴で育てられていたそう。村人に引き取られた赤ん坊は成長しついに母の敵を討ったと。

これが小夜の中山に語り継がれる「夜泣き石」の伝承だ。

この小夜の中山にはひなびたドライブインがあり、伝承を元に「子育飴」を名物にしている。土産に買って帰ろうかとも思ったが、あまり景気のいい話ではない（ていうか縁起悪いよね）のでやめておいた。



タクシーを降りた国道バイパスから分岐する国道を歩き、それとも分かれて金谷へ歩き出した。

谷間の狭い平地を切り開いた田圃のなかをもったいないような舗装道路がまっすぐに走っていた。つまらない話をしながら、てく・てく・てく・と我々は歩を進める。

この道を歩くのは一生のうちでただ一度きりだろうなあ

でもここがふるさとの人もいて毎日通学しているのだろうなあ

自動販売機なんて売上げあるんかな、農作業のあと飲んだりするんかな
なんてことを考えながら私は歩いていた。

掛川や小夜の中山の方向である西の山影に日が傾きだした。影が長く延びる。夕風なのか左右を山で囲まれているからか風が吹かない、汗がじっとりとにじみ出てくる。タオルで汗を拭う。気持ちいい。今が夏であることを実感できる。

気がつくと真横の堀切の下を列車が走っていった。私は「おお列車が走っているのだからこりゃ駅も近いなあ」「思ったより楽に到達したわい」などと脳天気なことを考えていた。しかしS

君の顔つきが妙に真剣だ。そして…

「おかしい」

この段階になって地図を囲むようにして現在地を確認する我々。間違いが発覚した。もっと早いうちに左側の山を越えなくてはいけなかったようだ。私もこの記事を書く段階になってようやく道路地図を開けて確認したが、駅は90度左手の方向で、まさにどんどん離れる方向に歩いていったのだ。でも当日はS君以外誰も道を把握しようともしていないのだから、仕方ない集団だわな。

引き返すのも大変なので少し先の窪地の集落から左手の山へ登ることにした。

「そうか…駅は山の向こうだったのか。」ようやく状況を把握する私。

ヒグラシが鳴いている。周囲の林にこだまして響きわたるあの独特の鳴き声は妖怪の鳴き声のようだと思う。私はこの鳴き声も耳にすると不安な思いがこみあげてくる。学生時代、駅や夜行列車を宿代わりに貧乏旅行をしていた頃は眠りにつくことができるのは夜遅くだった。日が暮れてからは行動することもできず、かといってする事もない無為な時間を過ごさなくてはならないこの時間帯のイメージがヒグラシの鳴き声とリンクして私の脳に定着しているのだろう。

谷あいの集落から茶畑に囲まれた山手の道へ。民家で道を尋ねる。たしかにこの山道を登っていけばよいという。案内板も正確な地図もない我々にとって気丈夫になる言葉だ。コンクリートの簡易舗装の道を上っていく。軽トラック1台分の幅があるかないかの細い道だ。山に入ってしまうと木々が風と光を遮るため、あつい。そして暗い。さらに農道は幾手にも別れ、本当にこの道であっているのか不安になる。我々は何度も歩を止め、確認しながら歩いた。ここで道に迷ったら大変だ。それこそ野宿だ。

どんどんどんどん高度が上がり、さきほどまで のほほん と歩いていた谷あいが眼下に広がった。真横を走っていた列車の音も今は遠くに聞こえる。

ほどなく頭上が開けたかと思うとあっという間に頂部が見えた。いきおい歩が早まる。

頂部と言うには意外にも広がった。そこは台地上になっており見渡す限りの茶畑、そして異様なほどの数の送風機（茶葉に露がつかないように設置してある）が林立していた。立派な2車線幅のアスファルト舗装道路が走っており、茶業組合の倉庫もあった。牧ノ原台地、そういえば社会科で習ったよなあ。ここはまさに茶業



試験場なのだった。

いままでの山間部の実に日本的な風景からいっぺんに大陸的な風景へ様変わりした違和感と、まさに暮れなずむ夕景がアンバランスで、でもとにかく峠は越えた安心感がごっちゃになって妙な気分になった。この違和感に戸惑いながらも、明るく風もあるこの台地上で我々は記念写真を撮った。



再び山中に入った。真っ暗だ、暑い。しかも今度は石畳の道だ。石畳の表面には苔が生えているうえ昼間の雨で濡れている。ただでさえ歩き疲れて弱っている足腰にこの石畳の下り坂は堪える。注意深く歩くことにはことさらに神経を使う。皆、無言になる。

真っ暗な中を無言で歩いていて、ふと気づくと誰もいなくなっていた、なんて想像してしまった。イヤだよなあ。



この石畳の道、以前は40mほどだったそうだ。いや江戸時代はずっと続いてたんだよ、今の時代の話ね。で、40mじゃあまりに風情がないということで300m以上拡張したそうな。我々にとっては「よけいなことすんなよ!」って気分だ。しかも途中に「すべらず地蔵」なんてのがあって怒り心頭に達する。「なに～、人様をすべらすとは不埒な地蔵め!」

ようやく石畳も終わり石畳茶屋に到着。もちろん開いてはいませんが、日中はそれなりの観光地なのでしょう。しばらく行くと人家も現れてまいりました。そしてほどなく国道に合流。

そして夕闇に浮かぶ金谷駅を眼下に見たときはちょっと感動モノでしたね。

金谷駅に着いた我々は食事のできる場所を探したがことごとく閉店している。時間は7時15分。地方の町なんてこんなもんだわな。雑貨屋で総菜やパンなどを買い込み今日3度目の食事となった。

第2日目へ続くメンバーは新金屋駅に宿を確保し、私は大阪へ戻るためにメンバーと別れた。私ひとりノンJRの旅を終えた。



JRで掛川へ向かう。掛川到着から3時間かかった金谷までの行程を15分で移動。汗だくのポロシャツが乾く暇もないほどの時間だった。そして掛川では新幹線ホームへあがった瞬間、轟音とともに「のぞみ」が通過。この長編成が一瞬で通過するのだから新幹線ってすごいな、ああJRって偉大だなあと思う。と同時に今回のようにローカル線にゆるりと揺られたり、てくてくと歩く旅もまた良いなあと思うのであった。